
冬の雨

津那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬の雨

【Nコード】

N4596B

【作者名】

津那

【あらすじ】

平凡な高校生の少年が出遭ってしまった物の怪。一際目を引く美少女を得た少年の危惧。憑かれたのは少女か少年か、迷信か。恋愛要素の濃厚な怪談話です。

第1話 迷い

垂れ込める雲と霧で天と地の境目も定かでなくなっていました。

うつそうと茂る雑木林、降り続いた雨で湿った落葉が靴底を沈める。全身、汗と霧で着ていたジャージがじとりと濡れ、ブナの葉から滴り落ちる水滴が首筋からタラリと肌を伝って流れ落ちる。

どこかに、雨露を凌げる乾いた場所を探さねば……

2月の寒さは、歩き回っていても体の芯まで貫き、体力ばかりを奪って行く。

田中篤朗は、真後ろを震えながら黙ってついて来る松垣由紀の存在を確かめながら、山をゆるゆると下っていた。

多分……もうすぐ日が暮れる。

雨と霧のせいで、午後3時の森は暗く、日暮の早い訪れを予告する。

第2話 合宿

更科田高校陸上部とバレー部の合同合宿が、梅沢岳稲穂自然館という研修センターで行われていた。学力重視でスポーツに力を注いでいない校風の更科田高校にあつて、3連休中に冬季合宿を試みるような熱血部活動は、この2つしかないのだが。

以前は、陸上部だけのクロスカントリ―強化鍛錬を目的に行われていたのだが、2年前に赴任した荒木教諭が女子バレー部を率いることになり、陸上部顧問の体育教師の寺尾が、夏休みの合同合宿に続き、今回の合宿を誘った形になっている。

男子の多い更科田高校では、陸上部員も18人が男子、女子は4人。女子バレー部は11人。女子バレー部の合宿参加は、陸上部員とつて嬉しいことだった。夏の大会を最後に3年が引退した冬は、少人数での合宿になる。

クラスメイトの桧垣由紀は一際目を引く美少女で、大人しい篤朗には高嶺の花のような存在。その他大勢に隠れて篤朗は密かに由紀を想っていた。明るく活動的で少し天然っぽい由紀は、美貌の割に晩熟らしく、浮いた噂の殆どが真実味の無いものばかりだった。由紀の親友であり同じ部活、同じクラスの湯浅美保子が同じく美少女ながらかなり奔放なだけに、由紀は美保子と一緒に男子とも気さくに話す。由紀が少しでも仲良くした男が噂になったりするだけだ。

夏の合宿では、何度も由紀に話しかけるチャンスがあつたのに、篤朗はドキドキするばかりで何もできなかった。

冬の合宿に、由紀が来るというだけで、浮ついた気分になったのは、厚朗だけではない。3年がいなくなり、厚朗たち2年がリーダーになっている。夏よりも、由紀に話しかけることが容易なのだ。

女子と男子が別れて、早朝から配布された弁当を持って鍛錬色濃いオリエンテリングを行う。男子のコースが長く険しく、女子の

コースは比較的緩やかだった。男子は3人6組。女子は4人2組、3人3組となり同時にスタートした。

昨夜降り続いた雨でぬかるんでいる場所が多いが、休憩込み7時間で優に回れるコース。夏にも同じコースを回っていて馴染がある。点在する15箇所に書いてあるクイズを解き、頭文字をキーワードとするゲーム性が高いもので、皆、楽しみ間隔で出発した。

天気の変わりやすい山特有、昼食休憩をとっている時に、雨が降り出した。雪が所々に残っているような山で、雨に打たれることは危険である。センターの位置から、黄色い発炎筒があがり、引き上げの合図を受けた。

篤朗がリーダーを務めていたチームは、11個のクイズを解いていて時間的に圧勝することが出来ると踏んでいただけに、少し残念な気がしながら、下山に向かっていった。

いくつものコースに分かれて散らばっていた仲間達と、彼方此方で合流しながら、下ると、女子達のグループと出逢った。

雨脚が強まり、かなり大粒の雨が降っている。

駆け足状態でぬかるんだ山を下っていた。

「田中君。」

声を掛けられて、篤朗が振向くと、美保子がいた。

「田中君。お願いがあるの。あたしと一緒に由紀を探してくれない？」

美保子が、篤朗の耳元で囁くように言う。篤朗を見ると、美保子は6人の1年生を連れていた。3人が泣きそうな顔をしている。

「探すって？」

「H地点で、朱美が大崎君とこっそり落ち合うために抜け出して、それを知らなかった由紀が、この子達を先に行かせて朱美を探しに行ったの。朱美は戻って来たんだけど、由紀だけがないのよ。」

「大崎は？」

篤朗が見回して聞く。上の方から下っているこの中に大崎の姿はない。

「大崎先輩は、あたしと別れた後、チームに戻っているはずなんです。」

「この子達が、朱美を手引きしながら、由紀を止めなかったのよ。」
美保子にキツイ口調で言われて、3人の女子は涙ぐんだ。

「言う前に、桧垣先輩が飛び出して行かれて・・・ごめんなさい。」
「あたしがこの子達から聞いたのは、下山の合図の後、この子達がG地点でウロウロしていた時よ。」

「桧垣先輩を探してたんですけど・・・見つからなくて。」

「田中君、お願いよ。あたしと一緒に来て。」

篤朗はクロスカントリーを得意とする長距離ランナーでもある。
美保子が他の男子ではなく、篤朗を選ぶようにして助けを求めた理由はそれだ。生真面目で、冷静沈着な篤朗に、美保子は絶るような目を向けた。

「湯浅は、この子たちを引率して下山しろよ。桧垣は、僕が探す。」

・ 桧垣は、大崎とその子の関係を知っていたの？

「はい・・・多分、知っていたと思います。あたしたちに口止めして、桧垣先輩、コースを外れて行っちゃったから。」

「どうして、H地点を選んだの？」

篤朗が朱美に聞く。

「あそこの傍に、防空壕があるんです。大崎先輩から、あたし、聞いていて、それで・・・。」

「あたしが行ってみたときは、由紀、いなかったの。」

美保子と言う。

「わかった。あの発炎筒は、桧垣も見ただ。僕が探しに行くけど、桧垣が戻ったら、赤い発炎筒を上げてくれるように先生に言うてくれ。」

「お願いよ。田中君。由紀を、お願い。」

美保子に頷いて、篤朗は、雨の中、踵を返した。

第3話 転落

コースから外れないように、目印を覚えては獣道に分け入り、篤朗は1時間ほど駆け回って、由紀を見つけた。由紀は、頂上展望台下の木陰に蹲っていた。

篤朗が駆け寄ると、由紀は灌木の根元に足を取られて動けなくなっていた。崖に赤土の滑った後があり、由紀が落ちたのがわかる。落ちて深く足を灌木の根元に突っ込んでしまったのだ。

「田中君。」

由紀は、ホッとしたような顔で涙ぐんだ。滑る崖を鳶を使って降り、灌木の根元を石で掘って由紀の足を出した。

「ありがとう。本当に。誰も来てくれないって思ってた。」

「湯浅から、事情を聞いた。H地点から外れたようだね。雨で、下山指示が出た。彼女達は全員無事、湯浅が引率して下山している。立てる？」

足を摩っている由紀に、篤朗は手を差し出した。

「うん、何とか。」

篤朗の手に& a m p ; # 2 5 6 8 1 ; まった由紀の手は冷たく、長い髪は雨に濡れ、唇は青褪めていた。ガタガタと震えている由紀の手を強く引いて、篤朗は滑る崖をよじ登った。

「湯浅に、君を探せと頼まれた。湯浅はG地点で聞いて、H地点まで戻って探したみたいだったよ。」

コースに戻ろうと向かいながら、厚朗が言う。

「彼女は、H地点の近くにある防空壕で大崎と落ち合った後、君のチームに戻ったそうだよ。」

「そお・・・良かった。朱美が無事で。」

「僕達も急いで、降りよう。」

「うん。・・・田中君が来てくれるって思わなかった。・・・ありがとう。」

篤朗は、展望台下まで一旦登り、そこからコースに戻るつもりだった。

きゃああっ

篤朗の後から着いて来ていた由紀が、足を滑らせて崖から落ちた。振向いた篤朗も、掛けたはずの岩が揺らぎ、そのまま崖を滑り落ちた。地盤がかなり緩んでいて、落ちた崖は赤土がむき出しになっている。落ち葉で覆われていて、粘土質のドシャが流れていることを見落としていた。

篤朗は、目を閉じて動かない由紀の傍に、滑りながら寄った。

「桧垣、桧垣。大丈夫？」

篤朗は気を失っている由紀の肩を叩いた。

「うつ・・・」

小さく声を漏らして、由紀がゆっくりと目を開けた。ゆっくりと上を見る。剥きだしの赤土の崖を絶望したような目で見た。

「あたし・・・あそこから落ちたの？・・・ごめんなさい。田中君を巻き込んだじゃったみたい。」

「僕も足を滑らせて落ちたんだ。この辺り、かなり地盤が脆くなっているんだ。気をつけないと。・・・大丈夫？」

「うん。擦り剥いただけみたい。」

泥だらけになったジャージを見て、由紀は弱弱しく微笑む。

「コース・・・戻れなくなっちゃったね。」

「うん。この崖を登るのは危険だよ。このまま、降りよう。」

「うん。」

篤朗の耳に、由紀の辛そうな呼吸が聞こえる。由紀は震えて、定まらない足元に何度か躓いた。

どこかに、雨露が凌げて乾いたところを見つけないと・・・

それにしても・・・この山、こんなに深かったか？

かなりタフなつморの篤朗も、寒さと足元を探してからの1歩1歩の前進と、迷っている時の不安と緊張で、かなり参っていた。後

から篤朗に全幅の信頼を寄せるように黙ってついて来る由紀の存在が、篤朗を奮い立たせる。

足を止めれば、途端に極寒が襲って来る。

動かねばならなかった。

どこまで下ればいい？

濃霧の中、篤朗と由紀の足音と、木の葉に溜まった水がザッ落ちる音だけが静寂の中に聞こえるだけ。

誰も探しに来てくれないのだろうか？

ガサリと、真後ろで音がした。由紀が膝と手を地面につき、頂垂れていた。

「大丈夫？」

由紀を起こそうとした篤朗に、由紀はグラリと体を傾けた。ドキリとする篤朗の頬に由紀の額が当たった。熱い。

篤朗は由紀を覗き込んだ。虚ろな目を篤朗に向け、「ごめんね」

と唇が動いた。熱い吐息、手は凍りのように冷たく、額と頬が熱い。

「桧垣。桧垣。すっかりしろ。こんなところで寝ちゃ駄目だ。」

由紀がヨロヨロと立ち上がりかけ、篤朗に抱きつく形でヨロめいた。篤朗が支える由紀は、柔らかく、グニヤリとして熱い。

篤朗は、由紀を背負った。

なんとかしなきゃ・・・。

疲れた篤朗の足に、由紀のグニヤリとした体は重い。

湿った地面に由紀は置けない。篤朗は、由紀を背負ったまま、足元を注意して1歩1歩、下へ向かって歩いた。

スウスウと、由紀の寝息が篤朗の首筋にかかる。由紀を背負った背が熱い。

篤朗は、何度も見た山のコース地図を頭に描くが、ここがどこなのか、もうわからなかった。

山の天気は容赦なく、弱った者に鞭打つように、小雨を雪混じりの雨に変えた。大粒で風を伴った雨は、由紀を背負った篤朗の顔を

打ち、背中の由紀を濡らした。

「うつつ。」

雨に、打たれて、由紀が目を覚ました。はあはあと苦しそうな息をし、ガタガタと震えている。

「田中君。．．．ありがとう。も、もう大丈夫だから。」

喘ぎながら、由紀は、篤朗の背から降りた。そのまま、膝が立たず、地面に座り込んだ。

「熱があるんだ。桧垣。歩くのは無理だよ。」

2人の間にも雨が音を立てて降る。由紀は、泣いているのか、泣きそうな由紀の顔に雨が流れているのか、喉の奥から搾り出すような声で「ごめんね」と言った。

「ほら。」

背を示した篤朗に、由紀は首を横に振って手を差し出した。

「肩、貸してくれたら、歩けるわ。．．．お願い。」

篤朗は、由紀を支えるようにしてゆっくり歩く。由紀は、はあはあと荒い息を吐きながら歩く。

「ごめん．．．僕、迷ってて．．．なかなか着かないんだ。」

「うつつ。．．．一緒にいてくれるだけでいい。」

「キツイだろうけど、どこかに休めるところ探さなきゃ。頑張ろう。」

「うん。．．．田中君で．．．良かった。」

由紀が、篤朗の胸に頭を少し寄せた。

由紀は意識まで虚ろになっているのだろうか、それとも．．．？

第4話 廃校

不思議なほどいきなり、篤朗の目に飛び込んだのは、鉄筋コンクリートの堅牢な建築物。2階建ての小学校分校だった。張り巡らされたフェンスが閉じられ、枯れた蔦が這っている。

周囲には、朽ち果てたビニールハウスの後、屋根が落ちそうになっている元店と、店先で鉄の塊化している自動販売機。枯れ草の生えたアスファルトの道。道の周囲に点在する廃屋が見える。

篤朗は、唯一まともそうな小学校のフェンスをよじ登った。錆びた鍵がついた門を蹴ると、鍵は崩れ落ち、ギイと音を立てて門が開いた。由紀が、そこから入って来た。

校庭に茂った雑草の跡、篤朗と由紀は校舎に近付いた。窓や引き戸を開けてみるが施錠は硬い。給食室横の窓が、強く引くとガタリと音を立てて外れた。篤朗は窓から入り、ネジ式の鍵を開いて引き戸を開けた。由紀が、寒さで震えながら入って来た。

校舎に入ると、強まった雨が更に強まり、ザアと、冬には珍しい真夏の豪雨のような勢いで降りだした。

篤朗の手を、由紀がキュツと握る。

「小学校・・・みたいだね。」

給食室、1年生の教室、職員室・・・保健室。

教室の窓を覗きながら、篤朗と由紀は、保健室に行った。

机も椅子も黒板もそのままに、廃校になってしまった校舎。止まった時計、掲示された時間割表に書かれた昭和59年の文字。

どの教室も、ドアも窓も開く。

職員室に入ってみたが、置かれた黒電話は当然のように不通で、厚朗と由紀の持っている携帯電話も電波が立たない。

2人は、ガタガタと奮えながら、保健室へ行った。

ベッドもシーツも、掛け布団も、棚の中には毛布もあった。

2つ並んだベッドは、カーテンで仕切られている。

カーテンの奥で、篤朗も由紀も、下着まで濡れ滴った服を脱いだ。乾いた毛布を被って、布団で覆い、しばらく震えているとようやく人心地ついた。

「た、田中君。」

由紀の声が聞こえ、篤朗は「何？」と応えた。

「そつちに、行ってもいい？」

「えっ……」

「ごめん……こ……怖い。」

「……いいよ。」

篤朗の声を待っていたように、由紀が、篤朗のベッドヘスルリとやって来て横に並んで座った。

由紀のベッドの横に脱いで広げた服、毛布と布団に包まった由紀を見て、厚朗はドキドキしてしまう。

このシュチエーションは……ヤバイ……

「よかった……やつと……寒くなくなったわ。」

「うん。」

寒くなくなったと言いながら、由紀の声は震えていて硬い。

「昭和59年に廃校になったんだね。この学校……保健室があつて良かった。毛布と布団があつて助かった。」

篤朗が言つと、由紀は篤朗の肩に額を寄せた。

「桧垣？」

篤朗がドキリと由紀を覗くと、由紀は熱い額を篤朗に当てたまま、スウスウと寝息を立てた。

篤朗は、由紀を肩で支えたまま、眠ってしまった由紀を見下ろした。

しばらくして、由紀がコトンとベッドに落ちるように横になった。包まっていた布団が落ちる。毛布からスラリと形のいい脚が覗く。

篤朗は、硬直したまま、由紀をじつと見下ろした。丸まった由紀の、布団を直してあげたほうがいいだろうと、思いながら、動けない。高熱で眠り込んだ由紀に対し、昂つてしまう肉欲を篤朗は恥じ

た。

好きで好きで溜まらなかった由紀と、2人つきり。由紀の毛布の下を想像するだけで、厚朗は眩暈がしそうだった。

由紀が寒さに震え、肌蹴た毛布を探ってもぞもぞと動く。篤朗は、由紀の布団を目を瞑りつつ直してやった。

由紀の安定したスウスウという寝息を聞くうちに、篤朗はいつの間にか眠り込んでいた。

狭いベッドで寝返りを打とうとして、篤朗は温かくて柔らかいものに触れ、薄く目を開けた。篤朗の顔の前に、由紀の可愛い寝顔があり、由紀は篤朗の素肌にピタリと寄り添ってぐっすりと眠っている。由紀の真っ白に透き通るような肌。篤朗に押し当てられた乳房。篤朗は、ドキリとして覚醒する。

雨は依然と降り続き、人口のものはすべて廃れた山村の廃校は闇のように暗い。篤朗の覚醒した神経は、由紀に触れている全身で由紀を感じて昂ってしまふ。

我慢できなくなって、篤朗が布団からじわりと抜け出した。

毛布を巻きつけて、広げた下着に触れてみる。そんなに時間が経っていないのか、グシヨリと濡れたまま穿けそうにない。

篤朗は、由紀に背を向けたまま、考えていた。

地図に、廃校や過疎化してしまった町村のことは全く書かれていなかった。梅沢岳は、合宿で来ているとはいえ、強化鍛錬のメニューでこなすコース以外、何も知らないのだ。昭和59年を最後に廃校になった学校や、廃村になった村があったところで、コースには関係ないから書かれていなかったのだ。

う……ん……

艶かしい声が聞こえ、篤朗は咄嗟に振向く。由紀の寝顔。

篤朗は、そつと由紀の額に手を当ててみた。

熱は下がっているようだった。

篤朗はほっとする。

額に当てたままの手、外したくなくて、篤朗は、由紀の頬、髪を

そつと撫でた。柔らかく甘い香りが漂い、篤朗は疼くような昂りに襲われて、由紀から手を外そうとするが、由紀のうっとりするような寝顔に、篤朗は引き寄せられてしまう。夢で見た由紀の唇。篤朗は、指でそつと由紀の唇に触れた。

ヤバイ・・・駄目だ・・・

篤朗は、由紀から顔を背けた。昂ってしまった呼吸を整える。

第5話 物音

カタカタと、風が吹き込んでいるような音が鳴る。

スウウと、冷たい空気が保健室まで流れ込み、篤朗は身を硬くした。

入って来たところ、給食室横の引き戸は閉じたはずだが、施錠はしたかな？

自分達を探しに来た誰かが、ここを見つけて入ってきたとしたら、由紀と自分のこの悪戯けた格好を見たら・・・ヤバイ。

篤朗は、毛布を体に巻いたまま、足音を忍ばせて保健室の窓とドアをゆつくりと螺子式の鍵を施錠した。廊下側窓、外側の出入り口の施錠を確認すると、由紀とベッドをくつつけて、隣のベッドに転がった。これで、やり過ごせる。

誰かに助けてもらいたかった思いが、ここに来て、やり過ごす方へ変わっている自分が、奇妙に思えるが、そっと空の薬棚に掛け渡して干そうとしている由紀の下着を見て、俯いた。

カタカタカタ・・・

風じゃない。

誰かの気配に、篤朗は身を硬くする。そのまま篤朗は、しばらくまどろみに落ちていた。

「ここだ。ここに居る。」

誰かの囁き声が遠くから聞こえる。息を潜めたまま震えている子猫のような感覚を背中に感じ、篤朗は、背に手を伸ばした。

柔らかく滑らかな肌の温もりと、ひゃん、と小さな甘い声に覚醒し、伸ばした手をそっと動かした。ドキリとして、篤朗はグルリと体の向きを変えた。目の前に、由紀の怯えたような顔がある。

「桧垣。」

囁いた篤朗に、由紀は震えたまま「ごめんなさいっ。」と囁く。

篤朗の由紀の下腹部にピタリと沿ってしまった足の根が起立してしまう。篤朗が自分のそれに手を添えると、由紀に触れてしまい、篤朗は唸った。

「田中君・・・廊下に、誰かがいるの。」

由紀は震えて体を強張らせたまま囁く。篤朗が、廊下を振向くと、暗闇の中、幾つかの漆黒の影がこちらに向かって覗き込んでいるように見えた。

「ここだ。ここに居る。」

その声は、廊下から聞こえた。

年齢も性別も感じさせない、奇妙な音のような声。由紀はビクリと体を震わせる。由紀の体が動くと篤朗の肉体が意思に反して反応してしまい、篤朗は乱れる息を整える。

「田中君・・・廊下には・・・何も見えないのよ。」

「娘か？」

「娘だ。若い、生娘。」

「娘か？」

「若い男も、居る。」

声は、廊下で囁くように複数が交わしているのが聞こえる。声を交わしながら、漆黒の影が揺れる。

「田中君・・・」

由紀が、震え、篤朗に身を寄せる。

「桧垣・・・動くなよ。」

「ごめん・・・」

「生娘・・・が、居るな。」

「こっ・・・怖い・・・」

カタカタカタ・・・

窓が鳴る。由紀は、篤朗にしがみついた。篤朗も息を殺す。

「誰だろう？」

「い、いないのよ。あたし・・・さっきトイレに行こうとして、あの声を聞いて・・・窓から廊下を見てみたんだもん。・・・だ、誰

もいなかったの。」

由紀が、震えながら囁く。

「生娘か・・・久し振りの馳走じゃのお。」

「早う・・・喰いてえ・・・。」

「喰いてえ・・・。」

ガタガタガタガタ・・・

由紀は、ひつと短く悲鳴を上げて篤朗にしがみついた。

木製の窓やドアなど、ガタガタとすれば窓枠ごと外れそうだった。

「ふ、服を着よう。」

篤朗の囁きに、由紀は頷いた。足音を忍ばせて服を取り、濡れた服に袖を通す。冷たさが全身を震わせる。篤朗は、廊下に駆け寄り、そつと窓から廊下を見た。

由紀の言う通り、そこには、誰も居ない。

雨は降っているが、僅かな月明かりに夜に慣れた目が、建物を淡く見せる。

ガタガタガタ・・・

誰もいないのに、窓が揺れ。

「生娘を、喰いてえ・・・。」

奇妙な声が聞こえる。

「誰かいますか？」

篤朗が声を出すと、ガタガタという音も声もピタリと止んだ。

「た、田中君・・・。」

濡れた服のまま、由紀が篤朗に寄り添う。

「誰もいない。大丈夫だよ。風だろう。多分。」

篤朗が、自分に言い聞かせるように言う。

「風？」

「給食室の窓をちゃんと閉めたかどうか、わかんないからね。」

「そ、そうだったの？声、何か、聞こえなかった？」

「風、じゃないかな？」

由紀は、篤朗の断定的な言い方に、素直に頷いた。

篤朗は、さっきの声や窓を揺らすものが、風とは思っていないが、では、何だというのか。自分にも由紀にも、風と言い聞かせながら、篤朗は、鍵を確かめていた。

覚醒し、冷たい服を着た篤朗は、尿意に襲われた。由紀も、さっきトイレに立とうとして・・・と言っていた。篤朗は、篤朗に寄り添いながらもじもじと落ち着かない由紀に、

「トイレ？」

と、聞いた。由紀は、困った顔で頷く。

「僕もだよ。トイレって・・・職員室の向こうだったね。」

「うん・・・そうだけど・・・この部屋、出るの？」

「桧垣、誰もいないよ。」

「・・・うん。・・・ねえ、絶対にトイレの前で待ってて。お願い。」

「わかったよ。一緒に行こう。」

第6話 トイレの怪異

篤朗が、保健室のドアを開けた。

「生娘だっ。」

「生娘。」

「生娘だ。」

無数の漆黒の影がゾロと、にじりよって来た。

きゃああああ

由紀が、悲鳴を上げる。

影から逃れて、篤朗と由紀は手を繋いだまま走った。

びよおおお・・・ 風が唸るような音を立てて、漆黒の影が2人に迫る。職員室を通り越し、1年生の教室に飛び込んだ。

ドアを閉めると、影は入れないらしく、教室の前の廊下を右往左往している。

由紀は恐怖で目を開いたまま、肩で息をしている。

「な、何なの。あれ。」

「わからない。」

「あたしのこと、生娘って言ってなかった？」

「聞こえたよ。」

「あ、あたし、食べられるのっ？」

フンフンフンと、廊下から犬のように鼻を鳴らしている。

「久し振りの馳走の匂いがする。」

「生娘か？」

「生娘だ。」

フンフンフン・・・

「怯えておるぞ。くくく・・・」

「た、田中君。」

由紀が、篤朗にしがみつく。篤朗は、由紀を抱き締めた。

「怯えちゃ駄目だよ。君の怯えに反応してる。」

「だ、だって……。」

「トイレ、大丈夫？」

「う……で、でも……。」

「ヤツラ……ただの影だ。影に怯えては、何でも怖く見えるさ。桧垣、トイレに行けよ。僕がドアの前にいてあげる。」

「や、やだ。」

「行くんだ。」

篤朗は、ドアを開けた。由紀を行かせて篤朗が影に向かった。

影が、ゾゾと、由紀の方へ向かう。

「駄目だ。行かせない。」

篤朗が、影に寄る。影が篤朗を怯えて避ける。

篤朗の鼻に、獣臭が漂う。

篤朗は、由紀の隣のトイレに駆け込んだ。

「出る時、声を掛ける。」

フッフッフっと、獣が臭いを嗅ぐ音が聞こえる。

篤朗は、ドアを開けた。トイレの中に影が忍び寄っている。篤朗は、影の中に手を突っ込んだ。

ギュギュギュギュッ

影に手応えを感じて、影を引っ張り上げた。

異形化した獣が、篤朗に牙を剥いて威嚇した。

「桧垣、桧垣。まだか？」

「た、田中君……駄目……。」

由紀の、か細い声に篤朗はトイレのドアを思いっきり蹴破った。

ペタリと座り込んでいる由紀に、異形化した獣がベタベタととり憑いている。

「桧垣。畏れるな。」

篤朗は、由紀の手足や腹にくっついた影を掴んで、投げ飛ばす。

由紀は、篤朗に倣って影を掴み取った。

フッフッフウ 影は威嚇しながら、篤朗に怯えたように、後退去りする。

第7話 物の怪

「来い。走るぞ。」

篤朗は、由紀を引っ張って、保健室に戻る。由紀を保健室の中にいれ、廊下で立ちはだかった。

「ここはお前達の住処か？」

「人間め・・・」

「生娘を置いて、立ち去れ。」

「お前達の住処を邪魔したのは、悪かった。今夜だけ、使わせてくれ。明日の朝には出て行く。」

「生娘を置いて、立ち去れ。」

「娘を、どうする？」

「喰う。」

「喰わせん。」

「人間め・・・何もかも、奪って行く。」

「人間の生娘、喰う。」

「何もしなければ、明日の朝には黙って出て行く。あの子に何かをすれば、大勢の人間がやって来て、山を潰してしまうぞ。山を焼くかもしれない。山を削ってしまうかもしれない。獣の復讐を人間は許さない。根こそぎ、絶えることになるぞ。」

「人間め・・・信じない。明日の朝、出て行く、信じない。」

「僕を信じなくても、人間の力は信じるだろう？ここに人間が大勢来るのは、わかるだろう。」

「お前、殺す。」

「お前殺す。生娘、喰う。」

篤朗は、駆けて職員室へ入り、運動会と書かれたロッカーを開けた。時間割表や、壁に絵や習字がそのままに貼られているところを見て、あるかなと思っていたものが見つかった。運動会や陸上競技大会に使う空砲。

廊下に出た篤朗を影が追う。

ゾロゾロと、篤朗に襲い掛かった瞬間、篤朗は発砲した。

パン パン パン パン

影は、右往左往逃げ惑い、散る。

フギューフツフツフ

ギョオオオ

廊下から消えて行く。

篤朗は、保健室に駆け込んだ。

由紀が、怯えた目で篤朗を見上げた。

「田中君。」

「多分、今夜は、もう、そっとしておいてくれると思うけど。」

「さっきの、ピストルの音……。」

「これ？」

篤朗は、由紀に見せた。

「えっ？田中君、それは？」

「運動会で、スタート合図に使う空砲だよ。職員室にあって良かった。」

「えっ？……ねえ、そんなもので、さっきのあれ……追いつたの？」

「暗くて見えないだけだけど、あれは、多分、異形化した獣だと思うよ。この山に住んでいた動物達。」

「異形化？」

「この世のものではないかも知れない。」

「えっ？」

「よくわからないけど、動物を追い払うには、コレが一番だろ。」

「何で、動物つてわかったの？」

「獣の臭いがした。動物園とか、学校の飼育室で、小さい頃嗅いだことのある臭いだったからね。」

「何で、何でそんな動物が、あたしを？」

「さあ……君が、怯えていたから、じゃないかな？」

「田中君は、どうして怖くなかったの？」

「怖いさ。」

「本当？・・・そんな風には見えなかったけど。」

「怯えた人間には、犬もよく吠えるだろ。」

「だって・・・怖かったんだもん。」

「僕は、君が山の中で熱を出した時の方が怖かったよ。」

「・・・凄いのね。田中君って・・・あたしを背負ってくれたし、お化けからも助けてくれたわ。」

由紀が、篤朗をうつとりとした目で見た。

篤朗は、ドキドキする。

やっぱり、由紀は可愛い。

こんなに近くで、月明かりだけの下で見ると、篤朗は由紀の美しさに見惚れてしまう。その由紀が、篤朗をうつとりと潤んだ目で見上げている。

狼狽えた目線の先に寄せたベッドが映り、由紀の素肌の感触が蘇り、急に気恥ずかしくなった。

「あ・・・えーっと・・・。」

何かを言わなくちゃと思いながら、意味不明の音が口から出る。

何て間抜けなんだ？僕は・・・

「ありがとう。」

うつとりした目のまま、由紀が篤朗に言う。暗くてよく見えないが、由紀の頬が桜色になっているように見えて狼狽えた。

「田中君・・・」

由紀が、スッと篤朗の胸に頬を寄せた。

「ひ、桧垣・・・。」

「田中君、好き。」

「えっ？・・・ひ、桧垣・・・そ、それって・・・？」

「ずっと・・・ね。ずっと好きだったの・・・田中君って、あたしじゃなくても、絶対助けたって思うんだよ・・・だから、こんな形で、いっぱい助けてもらって、言うことじゃないかも知れな

い。．．．でも、やっと、言えたわ。」

由紀は、恥ずかしそうに俯くと、篤朗に背を向けた。

「桧垣．．．」

篤朗は、背を向けた由紀を抱き締めた。

「夢じゃないかな．．．。僕も、君が好きだった。君だから．．．絶対、助けたかった。」

篤朗は上擦ったような、掠れた声で言う。

由紀は、篤朗の腕の中でクルリと回転して、篤朗の目を覗きこんだ。

「本当？」

由紀の、クルクルとした瞳が、篤朗をまっすぐに見上げる。

「桧垣。君が、好きだ。」

篤朗は、夢中で由紀を抱き締め、唇を押し当てた。

第8話 現実と夢

翌朝、篤朗と由紀は、保健室の汚れて朽ちかけたベッドの上で目が覚めて驚いた。

保健室の床板の間からは雑草が目を出し、泥を被ったような窓ガラスは、あちこちが割れ、見るも無残な廃校だった。

廊下に残した発炎筒の殻だけが、昨夜を事実にする。

割れたトイレ。ドアはボロボロに朽ち、便器の中にまで雑草が生えていた。

職員室のロッカーには、何も入っていない。

篤朗は、ベッド脇に置いた空砲だけが、錆びても傷んでもいないことに驚いた。昨夜、職員室を見た時は、書類や垂れ幕要の巻紙、体育用具室の鍵、リレー用バトンなどが入っていたのに。

給食室の中に、狸の親子がいて、篤朗と由紀を見ると、キュウと啼いて姿を隠した。排水溝から自由に出入りしているらしく、獣の臭いに満ちていた。

廃校を出て、校庭を歩く。朝の明りの中では、絶対に怖くて立ち寄れないと思う。

校庭はあちこち水溜りがあり、ぬかるんでいた。

篤朗と由紀は、肩を寄せて校舎を見上げた。

「昨日のこと・・・夢みたいね。全然現実じゃなかったみたい。」

「でも、僕らの気持ちだけは、夢じゃないよ。」

「うん。」

篤朗と由紀は口づけを交わす。

「うあ・・・嘘みたいだ。」

「何？」

篤朗と由紀の携帯の電波は2本くつきりと立っている。

篤朗が、電話を寺尾教諭が、心配しきった声を出した。

「よかった。松垣も無事か？」

「はい。一緒にいます。・・・小学校の廃校だと思うんですけど、昨夜、雨宿りしていたんです。」

「小学校の廃校？何だ？それは？」

「わからないんです。山を降りる途中で、桧垣が熱を出して・・・霧の中を山を降りたら、着いたんです。」

「ちょっと、待て。今、自然館の人に、荒木先生が聞いてくれている。で、桧垣は、熱はもう、大丈夫なのか？」

「はい。」

「あ、わかったそう。今から、迎えに行くから、その学校の前にいるんだぞ。」

「はい。お願いします。」

篤朗は、電話を切ると、もう一度ボロボロの廃墟と化した廃校を見回した。

「自然館の人は、ここのことを知っていたそうだよ。今、寺尾先生が来てくれるって。」

「昨日の晩のこと、誰も信じてくれないでしょうね。」

「信じないさ。・・・だから、コレは僕らの秘密だね。」

篤朗は、空砲をリュックに仕舞った。

「ねえ、桧垣。・・・あのさ、由紀って呼んでいい？」

「ええ。いいわ。篤朗君。」

「知っているんだ？僕の下の名前。」

「ずっと好きだったってこと、まだ、信じてくれないの？」

「うん。そうじゃないけど。嬉しいなって思っで。」

「あたしも、嬉しい。」

「由紀って呼べるコト知ったら、皆、僕達が付き合っているってわかってくれるよね。」

「うん。」

暗い中で見る由紀は美しかったけど、明るい太陽の下で見る由紀は、キラキラしていて可愛くて、篤朗は抱き締めてキスをしてしまふ。由紀はうつとりと篤朗を見上げて微笑む。

第9話 雨、祟り

翌朝、篤朗と由紀は、保健室の汚れて朽ちかけたベッドの上で目が覚めて驚いた。

保健室の床板の間からは雑草が目を出し、泥を被ったような窓ガラスは、あちこちが割れ、見るも無残な廃校だった。

廊下に残した発炎筒の殻だけが、昨夜を事実にする。

割れたトイレ。ドアはボロボロに朽ち、便器の中にまで雑草が生えていた。

職員室のロッカーには、何も入っていない。

篤朗は、ベッド脇に置いた空砲だけが、錆びても傷んでもいないことに驚いた。昨夜、職員室を見た時は、書類や垂れ幕要の巻紙、体育用具室の鍵、リレー用バトンなどが入っていたのに。

給食室の中に、狸の親子がいて、篤朗と由紀を見ると、キュウと啼いて姿を隠した。排水溝から自由に出入りしているらしく、獣の臭いに満ちていた。

廃校を出て、校庭を歩く。朝の明りの中では、絶対に怖くて立ち寄れないと思う。

校庭はあちこち水溜りがあり、ぬかるんでいた。

篤朗と由紀は、肩を寄せて校舎を見上げた。

「昨日のこと・・・夢みたいね。全然現実じゃなかったみたい。」

「でも、僕らの気持ちだけは、夢じゃないよ。」

「うん。」

篤朗と由紀は口づけを交わす。

「うあ・・・嘘みたいだ。」

「何？」

篤朗と由紀の携帯の電波は2本くつきりと立っている。

篤朗が、電話を寺尾教諭が、心配しきった声を出した。

「よかった。松垣も無事か？」

「はい。一緒にいます。・・・小学校の廃校だと思うんですけど、昨夜、雨宿りしていたんです。」

「小学校の廃校？何だ？それは？」

「わからないんです。山を降りる途中で、桧垣が熱を出して・・・霧の中を山を降りたら、着いたんです。」

「ちよっと、待て。今、自然館の人に、荒木先生が聞いてくれている。で、桧垣は、熱はもう、大丈夫なのか？」

「はい。」

「あ、わかったそうだ。今から、迎えに行くから、その学校の前にいるんだぞ。」

「はい。お願いします。」

篤朗は、電話を切ると、もう一度ボロボロの廃墟と化した廃校を見回した。

「自然館の人は、ここのことを知っていたそうだよ。今、寺尾先生が来てくれるって。」

「昨日の晩のこと、誰も信じてくれないでしょうね。」

「信じないさ。・・・だから、コレは僕らの秘密だね。」

篤朗は、空砲をリュックに仕舞った。

「ねえ、桧垣。・・・あのさ、由紀って呼んでいい？」

「ええ。いいわ。篤朗君。」

「知っているんだ？僕の下の名前。」

「ずっと好きだったってこと、まだ、信じてくれないの？」

「うん。そうじゃないけど。嬉しいなって思っで。」

「あたしも、嬉しい。」

「由紀って呼べるコト知ったら、皆、僕達が付き合っているってわかってくれるよね。」

「うん。」

暗い中で見る由紀は美しかったけど、明るい太陽の下で見る由紀は、キラキラしていて可愛くて、篤朗は抱き締めてキスをしてしまふ。由紀はうつとりと篤朗を見上げて微笑む。

第9話 雨、祟り（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございました。
じめじめした怪談話を書きたくて。久し振りの投稿です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4596b/>

冬の雨

2010年10月8日13時01分発行